

ヨハネ福音書15章12節～17節が本日与えられた聖書箇所ですが、ここでは2つのことが大前提として語られています。まず、互いに愛し合うこと、次に、友のために自分の命を捨てること、です。この2つのことをテーマにした小説に、太宰治の短編「走れメロス」があります。小学生の教科書に載っていて初めて読んだとき、衝撃を受けたことを覚えています。

あらすじは、純朴な羊飼いのメロスがある町に妹の結婚式のための品物を買いに訪れるのです。けれども、その町の人々がひどく落ち込んでいることに気づきます。そこで住民に理由を聞くと、人間不信のために多くの人を処刑している暴君の存在を知り激怒します。そこで、メロスはその暴君を暗殺する決意をして王城に侵入するのですが、あえなく衛兵に捕らえられ、王のもとに引き出されます。人間は私欲の塊で信じられない存在だと言う暴君に、メロスは「人の心を疑うのは、最も恥ずべき悪徳だ」と言い放ちます。そうして、死刑が確定したメロスは、妹のもとに帰って結婚式を挙げてやるために、3日後の日没まで猶予をくれと頼む。

そして、その町に住む友人を人質として王の前に差し出したのでした。人間不信の塊である王は、メロスが友人を見捨てて逃亡するものだろうと考え、自分の考えが住民皆に証明できるとの思惑から、その申し出を受け入れます。メロスは一睡もせず家に帰り、妹の結婚式を挙げると、最後の一日の明け方に再び王のもとへ戻るために出発します。ところが、豪雨のために橋が流されていたので濁流を必死に泳ぎ切り、さらに王が差し向けた山賊に襲われますが何とか撃退します。それらの思いがけない出来事に精魂尽き果てて動けなくなってしまう。

そこに清水の流れる音が聞こえてきて、清水を飲むことで、一度戻れることを諦めかけたメロスでしたが、再び走りだすことができました。町に到着すると、ぎりぎり十字架にかけられて殺される寸前の友人を助けることができました。メロスと友人は互いに、裏切る思いになったこと、裏切られるのではないかという疑いを抱いたことを告白しあい、一発ずつ頬を殴り合い、熱い抱擁を交わします。この様子を見ていた暴君は、悔い改めて、「自分も仲間に入れてくれ」と懇願する、という内容です。小学生の時に、省益を受けたと言いましたが、それは、メロスのように、自分が暴君のところに戻るといふことは、死に行くためであり、友人の命を助けるためだといっても、わざわざ自分の命を捨てに戻るといふのは小学生にとっては衝撃的だったことを覚えています。そもそも、友人を自分の身代わりを立てるといふのも、友人の立場に立ってみると不思議なことだと思いました。友情の物語というくくりでは済まされない不思議さを感じました。

今、この物語を読みかえしてみると、キリスト教の信仰の視点から解釈できます。メロスは妹の結婚式を兄として立派に執り行いたいわけですが、彼の信念からするならば、自分が友人を裏切るようなことをするつもりは最初からありません。その自分の信念に忠実だからこそ、友人も身代わりになることを承諾したのでしょう。友人も

メロスと同じ信念を持った人物なのです。

でも、小説の中でのメロスはいろいろな行動や言葉で見る限り、自分勝手、つまり思い込みで生きている人物です。暴君に怒る感情を抱くのは理解できますが、その怒りで暴君を殺そうとするのはいかにも独りよがりです。人の心を疑うのは最も恥ずべき悪徳だという発言を見る限り、メロスは自分が嘘をついたことがないかのような自己理解しかもつていません。友人を身代わりに立てる際も、自分が戻らなければ、いかように扱っても構わないという言い方をしています。かなり思い込みで生きている人物だということがわかります。自分の理念と現実の行動の間に少しも乖離がないかのような生き方をしている人物であり、ある意味おめでたい人物です。逆に言えば、常に現実をシニカルにとらえて、自分の理念などは最初から投げ出して生きているような人物と五十歩百歩なのです。

いずれにしても、メロスは自分の思い込みで死刑になる事態を引き起こしたのですが、そのあとに友人を巻き込んでしまうことを見ても、自分と言う存在のことが全く分かっていません。わかっていないから、大雨になつて橋が流される危険性にも思いをはせることができません。けれども、独りよがりの生き方が困難と苦しみをもたらし、それによつて自分の理念が脅かされることを経験します。おそらく、このあたりが太宰の明らかにしたいところなのでしょうが、これ以上「走れメロス」に突っ込んでいくとヨハネ福音書から外れてしまうので、本筋に戻ります。

自分が理念を抱いて生きていても、理念なく生きていたとしても、人生途上で生じる苦難や苦しみが人間を目覚めさせるのです。私たちが苦しみに襲われた時、苦しみを持って余すのです。それは理念を持つているとか持つていないとかにかかわらず、起こりうることなのです。ですから、何らかの理念と申しましたが、信仰を持つていても信仰を持つていなくても、苦しみを持って余すことは起こるのです。

どうして苦しみを持って余してしまうかと言うならば、苦しみを自分のものとして同化できないからです。自分のものとして飼慣らすことができないから苦しいのです。自分のものとして消化できないし、同化できないから苦しいのですが、その状態は、その苦しみが自分を超越しているからです。

私たちが安らかで満足して自分自身であるとき、苦しみが襲いかかることによつて、その安らぎが突き破られて、自分が解体するのです。自分が解体するということは、自分が無力であることに気づくことです。この苦しみによつて自分が解体することによつて、苦しみがどうしようもない他者だということにも気づかされるのです。他者という存在は自分の中に同化できないものですから、苦しみに襲われることで私たちは、私たちが抱いている自分という存在は実は自分でさえなかったということに気づくわけです。私たちは、初めから強固な自分という存在があつて、この自分が何かをしていると思つていますが、その自分という存在は苦しみに触まれることによつて、実は自分が自分でもなかったということに気づかされるのです。友のために自分の命を捨てること以上の大きな愛はないというイエスの言葉は、苦しみに出会つて、自分の無力さに気づかされることによつて、神によつて創造された存在としての立ち位置に繰り返し戻つて再出発していくしかない信仰者のことを指しているのです。